NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

〒350-1175　埼玉県川越市笠幡１９４８－６　TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
郵便振込：「中帰連・平和記念館」（００１５０－６－３１５９１８）

ドイツ等の「平和記念館」訪問記

松村高夫・理事長

以前この会報に「ドイツ便り」を載せていただいたが、本号ではドイツなどで訪れた平和記念館について書くことにしよう。まずは、東西ドイツを分けていたベルリンのブランデンブルグ門のすぐ近くにある「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」と「情報センター」である。私は５年ほどまえに初めてここを訪れたのだが、昨年１２月、雪が積もるなかでの２度目の訪問のときも、ベルリン市の一等地１万９千平方メートルに林立する２７１１基の記念碑は、強烈に私の眼の中に飛び込んできた。１つの記念碑の高さは人の背より高いコンクリートの直方体である。それが２７１１基もあるのだ。

１９８０年代末にジャーナリスト・ロッシュと歴史家・イエッケルの提案で起こった市民運動は、１９９９年６月ドイツ連邦議会に記念碑建設の基本方針を決議させるに至った。２００３年４月、建築は着手され、２００５年４月に一般公開された。私が最初に訪問した２００７年１０月、ハレ市の大学で開かれたシンポジウムで、私は「７３１部隊と細菌戦」について報告したのだが、報告最後のナチス・ドイツのアウシュヴィッツを７３１部隊と比較史的に検討する必要があるとの私の提言に対して、予想していたように、フロアのドイツの伝統的な歴史家たちから、ドイツのホロコーストは絶対悪なので、他の虐殺と比較できないし、するべきでもない、という猛烈な批判を浴びた。その点はともかくとして、そのシンポジウムで他の報告者が、ベルリンの「ユダヤ人のための記念碑」設立までの１５年のあいだに直面した多くの批判と困難について報告した。ベルリンでホロコーストが起こったわけではないのに、どうしてベルリンに、しかもドイツだけでなくヨーロッパ全体のユダヤ人のための記念碑をつくる必要があるのか、というのがその批判の一つだったという。

記念碑の広場の地下には「情報センター」がある。入口を入るとすぐに、１９３３年から４５年までのナチズムの恐怖の政治の概観がテキストと写真で展示されており、約６００万におよぶヨーロッパ全体のユダヤ人の迫害と虐殺の略史が書かれている。

次の「次元の部屋」では、壁を一周するパネルにヨーロッパの国別に犠牲者数が書かれており、床には迫害されている間に記された日記、手紙、メモが拡大されて投射されている。強制収容所のなかで書かれた断片的なメモなどが、おぞましい収容所内部の実態を示している。つづく「家族の部屋」では、１５

家族を手がかりに、ナチス以前の平和な生活が示され、それがテロの結果どうなったのか。離散・追放・虐殺されていく過程を一人ひとり辿ることによって、ユダヤ民族の多彩だった生活・文化がナチス・ドイツの出現によって壊滅させられていく過程が、具体的に示されている。

さらに「名前の部屋」に入ると、ヨーロッパ全体で殺害されたり行方不明になったユダヤ人の名前と略伝を聞くことができる。それぞれ視聴者はボタンを押して特定の人の体験談を聞くことができるようになっているのだが、全犠牲者の体験談の読み上げを聞くと、６年半以上かかるとのこと。それだけの量の聞き取りを記録し保存しているのである。
「現場の部屋」では、全ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害の現場２２０箇所が、記録映画や写真資料を使って示されている。ビデオ公文書室には、コンピューター端末１０台があり、ホロコースト生還者のインタビューを多様な言語で提供しており、これらのビデオで、氏名、場所、事件に応じて多岐にわたる検索が可能になっている。

他の記念館については簡単に触れるにとどめよう。ベルリンの「ユダヤ人博物館」の新しい建物は、館内通路が坂になったり、狭くなったり、行き止まりになっていたり、行き止まりの扉から中庭に出られるようになっていたりして、来館者が一歩建物の中に入ると、ユダヤ人の辿った道を体感できるように設計されている。つまり、ユダヤ人で迫害を逃れて海外に移住したもの、国内に残り迫害を受けたもの、強制収容所送りになったもの、というのが通路を歩くと体感されるのだ。そして館の上の方の部屋では、中世からナチスに迫害されるまでは、ユダヤ人の文化（技術、芸術、文学、思想哲学、宗教）がいかに見事に開花していたかが、豊富な資料で展示されている。

2005 年 5 月にブランデンブルグ門の南に開設された『虐殺されたヨーロッパ・ユダヤ人たちのための記念碑』（ホロコースト警鐘碑）

また、デンマークのコペンハーゲンにある「抵抗博物館」は、人魚姫の像から歩いてすぐのところにあるが、意外に粗末な建物だなーと思って、入ってみて驚いた。デンマークがナチス・ドイツの支配下におかれ、強制収容所まであったことを、私は全く知らなかった。ナチの支配に対する抵抗運動の具体例（たとえば地下運動のビラ・新聞の印刷機など）が展示されていた。全館の展示の説明と資料は、実に分かりやすくできている。こんなに見事に展示されている平和博物館を、私はイギリスでもドイツでもみたことがない。私のメモ帳には昨年（2012 年）のその日のことが、次のようにしるされている。

「Ｄｅｃ．２２　冬至　曇　３時半暗くなる１２時　ホテルを４人[私と妻と娘と夫]ででて、１２：３０衛兵の交代。イギリスのよりずーと質素。そこからドーモへ。すばらしい天井。歩いて人魚姫へ。世界の３大ｄｉｓａｐｐｏｉｎｔｅｄ　ｓｔａｔｕｅといわれるだけある。とにかくｃｈｉｌｌｙ．寒い。[人魚に]服を着させるべきだ。デンマーク人は何故世界から観にくるのか不思議だといっている。そこから ResistanceMuseum に行く。これは well-exhibited である。この種のｍｕｓｅｕｍでｔｈｅ　ｂｅｓｔ。ライプチヒの統一Ｍｕｓｅｕｍなどの展示はひどいもののだ。ここは史料もたくさん展示。英文目録が手に入り幸い。日本でデンマークのナチ支配と抵抗について研究している人はいないのではないか。鉄道労働者のサボタージュなど

の抵抗はすごい。９歳位の少年に説明している初老の人がいた。・・・・・」

今でもその情景をありありと思い出すのだが、初老の方がお孫さんだろうか、少年に展示の史料の前で戦争中のデンマークの歴史を一生懸命説明しているのをみていて、私はなぜか涙のにじんでくるのを禁じえなかった。

連載　記念館資料室から（第3回）

「鬼」とは誰のことか？

別掲のとおり、昨年 7 月から 3 ヶ月に一度のペースで「中帰連に学ぶ会」を開催し、戦犯の手記を読みながら学び合い、語り合う機会も設けています。参加者が少数ですので、この連載でも学ぶ会で取り上げた手記を御紹介したいと思います。

今回取り上げるのは、千葉県の佐野勲さん（1922 年生まれ、陸軍曹長）が書いた「母」というタイトルの創作随想です。

▼「不景気」と＜上昇志向＞のはざまで育った青少年期

佐野さんのお父さんは、「小さい時からよく私に不景気の事や、苦労して金を貯めた話等をし」、「口ぐせのように偉くなるんだ、偉くなるんだ、そのためにはどうしても金を貯めなければだめだ」と言い聞かせてきました。そのため、佐野さん自身も「いつしか偉い人、金持になろうと考える様になってい」ました。

お父さんは、10 年ごとに戦争が繰り返され、それが終わるたびに襲ってくる不景気に苦しんだ体験から、「大きな工場に行かにゃ、戦争が終わったら直ぐまた首になってしまう」とも言い聞かせており、「小学校を卒業したばかりの私を父は住友電気会社に入れ」ました。そのために「会社の上役と思う家に父につれられて、おり菓子を持って歩いて廻った」といいます。1937 年、中国への全面的侵略が始まった年のことです。

戦争が起きる度に景気の波が大きく振れ、その時に苦しめられるのは中小企業や下層労働者たちばかりだという「社会のしくみ」に気付いたお父さんは、そこから抜け出すために懸命でした。お父さんの「偉くなれ、金を貯めろ」という＜上昇志向＞は、幼い佐野さんの内面にもしっかり植え付けられました。

ところが、苦心の末に入社できた大企業にあっても「町工場よりはるかに賃金は安く、おまけに残業ばかりやらされ、私は入社してまもなく（略）やめらしてくれと何回も話」すほどでした。現在の大企業におけるサービス残業や、低賃金の派遣労働などを彷彿とさせます。

▼「出世のため」に志願して軍隊へ

1941 年にアメリカとの戦争が始まると、会社でも軍隊式の演習が始まり、「びんたも飛んだ」ため、さらに嫌気が差しました。その頃、「満州」から復員した兵士の野戦体験を職場の昼休みにみんなで聞きました。「戦地に行ったら（略）出世も早い、それに何でも勝手ほうだいのことが出来る。このわしでさえ手柄を立てて恩給取りになったし、（略）会社の課長もうまく行けば保証された様なもんだよ」という話を聞かされ、佐野さんは「無性に少年戦車兵、予科練、通信兵等の志願に頭が向く」ようになっていきました。

そしてついに、「出世の早道」として軍に志願することを一人で決め、区役所で手続きを取りました。兵事係の窓口では志願したことを褒められ、「何とも言えない誇りに感ぜられ、口笛を吹きながら家に帰った」といいます。

しかし、数日後にそれを知った両親から厳しく叱責を受けます。父からは「親の反対をおしきって出て行く奴ぁ、俺の子供ぢゃない」と、母も「泣き崩れ」ながら佐野さんを責めました。居たたまれなくなった佐野さんは、その後は夜遅くまで家に寄りつかなくなりました。

そんな母も入営する日に備えて千人針を準備し、見送りの際にはひたすら身体を心配すると同時に、「まわりを警戒する様な低い声で『星はどうでもよいからなー、何時も母ちゃんがお前と一緒にいるつもりでなー』」と涙ながらに声をかけました。「星」とは軍服に付ける階級章のことです。軍国主義の世にあっても、両親の本音は「出世」より「命」だったのです。ところが、若い佐野さんは時代の波もあってか、＜上昇志向＞に飲み込ま

れてしまったのです。

▼何が「人間」を「鬼」に仕立て上げたのか

入隊して一週間後には山東省済南に着きましたが、「その日から生き地獄の生活」を経験します。ベルトや木銃での「ビンタに私は毎晩枕をぬらした」と書いています。涙を抑える手に想い出されるのは、母の「あかぎれだらけのがさがさの」手でした。それでも「いくじなし、お前はそれでも志願兵か？」「何くそ負けるものか」と「何回も自分に言い聞かせ」ては、「戦友を押しのけて、ねずみの様に内務班を駆け廻った」のです。

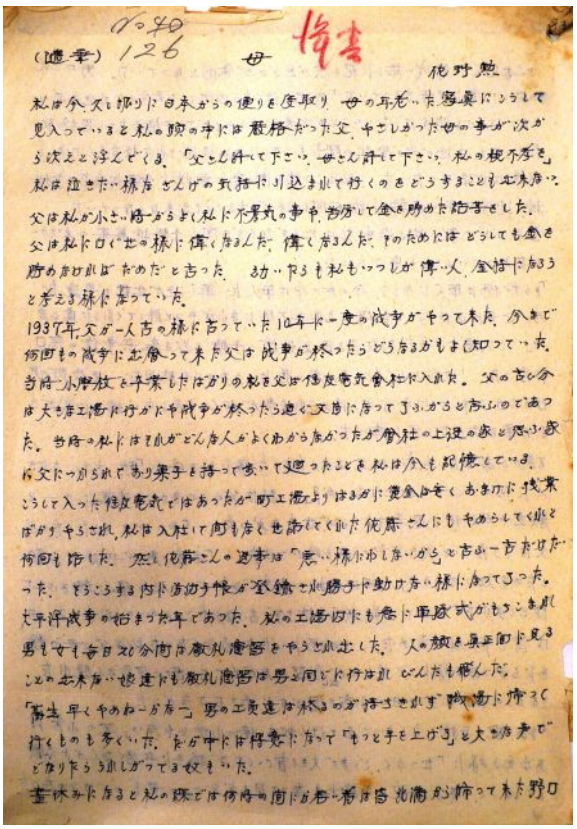
そうして一等兵になった頃には、「もう母のやさしかった思い出もうすらぎ、便りを出すのが面倒くさくなり、人を平気で殴ったり蹴ったりする人間になっていた。そしてとうとう私の母と同じ体つき、顔つき、年格好の中国の老婆を殴りつけ、蹴とばし、遂には面倒くさいと射ち殺してしまってさえいた。こうすればする程、星はふえ、私は上等兵になった頃には作戦討伐が待遠しく、常に小隊長、中隊長に可愛がられる兵隊になっていた」と一気に悔悟を書き連ねています。

▼「人から鬼へ」か、「人が鬼」なのか

こうした軍隊経験は、戦犯たちによってしばしば「人から鬼へ」と表現されます。ここで注目しておきたいのは、軍に適応しようとして自分を奮い立たせていた瞬間も、また慣れきってしまった後に繰り返された残忍な行為も、いずれも＜上昇志向＞に基づいた「努力」としてなされた、という点です。それは「鬼」の所業というには、あまりに「人間」的な振る舞いの帰結だったとはいえないでしょうか。私たちの身近にあっても、＜上昇志向＞に基づく「努力」は珍しいものではありません。そうした日常的な行為が取り返しのつかない野蛮さをもたらしたことを考えれば、戦犯たちと私たちとの間には、思ったほど大きな隔たりはないといっては言い過ぎでしょうか。

経済不況、下層労働者の困窮、出世第一の上昇志向（＝業績主義）……、佐野さんが生きた時代は、現在の私たちの社会と驚くほど似ている部分があります。戦争のできる国家を望む声が高まっている今こそ、戦犯たちの経験を活かさなければと強く感じます。

石田隆至（平和学）


No.40
(遺書) 126
母
佐野勲
私は今、父に頼りに日本からの便りを受取り母の年老いた姿に心うして見入っていると私の頭の中には厳格だった父、やさしかった母の事が次から次へと浮んでくる。「父さん許して下さい、母さん許して下さい」私の横不孝を私は泣きたい様な気持に引込まれて行くのをどうすることも出来ない。父は私が小さい時からよく私に不孝者の事を、当分して金を勝めた話をした。父は私に口ぐせ世の様に偉くなるんだ、偉くなるんだ。そのためにはどうしても金を勝めなければならぬと言った。お前やるも私もいつしか偉い人、金持になろうと考える様に成っていた。
1937年、父が一人言の様に言っていた10年に一度の戦争が始って来た。今まで何回もの戦争に出会って来た父は戦争が終ったらどうなるかもよく知っていた。当時小学校を卒業したばかりの私を父は満友電気会社に入れた。父の言い分は大きな工場に行かせ戦争が終ったら速く文盲に成ってもらいたいからと言ふのであった。当時の私にはそれがどんな人がよくわからなかったが会社の上役の家と思い家に父につれられてあり菓子を持って歩いて廻ったことを私は今も記憶している。
こうして入った満友電気とはあったが町工場よりはるかに賃金はよく あまりに残業ばかりやらされ、私は入社して間も なく他所へ行く他所へにもやめさせてくれと何回も訴した。だが他所さんの返事は「悪い様にはしないから」と言ふ一言だけだった。ちょうどする内に満州帰りの姿鏡と小勝手に動け方い様に成ってきった。
太平洋戦争の始まった年であった。私の工場内にも急に軍隊式がもってきれ男も女も毎日20分間は敵礼遵守をやうと出出した。人の顔を真正面に見ることの出来ない地連にも敵礼遵守は男と同じに行はれ どんなにも悩んだ。
「畜生 早くやめねーか馬一」男の工員達は林るのが待ちきれず職場に帰って行くものも多くいた。だが中には将来に成って「もっと手を上げろ」と大きな声でどなり散らす様にがってる奴もいた。
昼休みに成ると私の隣では何時の間にか若い者は皆 北満から帰って来た野口

第2回　記念館「中帰連に学ぶ会」

2012/11/11

「寛大政策の原点を求めて
～中国側史料から考える～」
（報告「中帰連に学ぶ会」事務局長石田隆至さん）

1964年6月に撫順管理所が作成した「十四年来教育改造日本戦犯工作基本総括」（十四年総括）という中国側史料から、「寛大政策」とは何かについて考えてみたい。

管理所員らの回想をみると、最初から「寛大」一筋だったわけではない。最初期には、人道的に処遇してもその思いを踏みにじる日本人戦犯の態度に副所長でさえ嫌悪を感じ、所員たちも人道的処遇の必要性を受け止めきれず、納得できなかった。

戦犯の反発や抵抗があまりに激しいため、表向き「厳格」な対処を取ると、報復を恐れる日本人の多くが病気になるほどだった。この「厳格さ」

は「罰する」という意味での厳格さではなく、戦犯の抵抗などの混乱を収拾し教育を進めるためのものであった。しかし、戦犯たちの反抗的態度はかえって激しくなり、人道主義だけでも厳格さだけでも日本人戦犯には効果が現れないことが明らかになった。

そこで管理所は方針を全面的に見直し、「積極的に」戦犯にかかわれるよう自己教育を行った。感情的挑発に感情で応酬しないことを確認し合い、自己の感情をコントロールし、理性的で穏やかに、しかし厳格な対処をすることに決めた。実際に、戦犯の詭弁にも感情的に反発することなく、また頭ごなしに全否定するのでもない、理性的対論で諭すような対応を取った。管理所員が感情を抑えて対処していることを感じた日本人は、「厳格さ」のなかに徐々に「寛大さ」を見出していった。

朝鮮戦争が終わる頃には、管理所は状況をコントロールできるようになり、理解が進む者には「励まし」を、反発を続ける者には「厳しく」対処していくようになる。銃を持った巡回をやめて目立たぬような方法を採り、運動時間も長くし、健康診断や病気治療にも力を入れ、生活水準も改善したりして、管理所は辛抱強く対応した。戦犯らの目には、徐々に「厳格さ」から「寛大さ」が前面にせり出すように映ったのではないか。

管理所員も繰り返し自己教育を続け、戦犯たちの自尊心を傷つけず、理解をしつつ粘り強く教育的に導けるよう努力していた。それでも罪を認めない者には「自白しなくても被害者が告発し、罪を逃れることはできない」と厳格に迫った。こうした内実から「厳格」であることが同時に「寛大」でもあるというのが「寛大政策」だったことが見えてくる。

最後に、現在問題化している領土問題について「撫順・太原の経験」に基づいて考えてみたい。

去る9月に管理所指導員だった呉浩然先生のご子息の呉征南さん（元管理所職員）に面会した際、今回の領土問題について話があった。呉さんは「中国側はずっと我慢してきたが、我慢しうる限界を越えてしまったことを、戦犯たちに話してもらいたい。中国側が言っても通じる話ではない」と訴えていた。

戦後長く中国への「封じ込め」政策が続くなか、中国側は日中友好・不再戦を優先するため、日本への賠償金請求を放棄し、「領土問題」も棚上げにした。これは、反抗し遊び呆ける戦犯に対しても耐えながら寛大措置を採ってきたのと同様に、敗戦後も戦争の反省を示そうとせず、むしろアメリカの封じ込め政策に加担してきた日本に対して「我慢」して示した寛大な戦後対日方針だった。その後も、教科書問題や靖国参拝で日中平和友好条約の理念を裏切り続けた日本に中国は「我慢」し続けてきたのである。

今回の尖閣「国有化」はこの寛大さの文脈を踏みにじる意味をもっていた。領土をいったん譲れば、どれほど酷い目に遭うかという教訓を、アヘン戦争以来の100年間で痛いほど学んだ中国にとって、領土問題は絶対に譲歩できない問題である。そこにあえて踏み込んだ日本側の対応は「我慢の限界を越える」ものであり、中国側の今回の「厳格な」対応を導いてしまった。

だからこそ元戦犯や後継世代に「寛大政策」を語り、辛くても歴史の事実に向かい合い、歴史を歪める動きと闘ってほしい、そうでなくては真の友好は生まれない、というのが呉さんのメッセージだった。

第3回　記念館「中帰連に学ぶ会」

2013/3/10

「戦犯の手記を一緒に読み、
現在について考える」（1）

（報告「中帰連に学ぶ会」事務局長石田隆至さん）

2月末から3月にかけて、山陰中帰連の関係者に聴き取り調査を行ったので、簡潔に御報告したい。中帰連の難波靖直さん、故・鹿田正夫さんの御遺族のかをる夫人、故・藤原恒男さんの御遺族の時子夫人を訪ねた。人口が多くて平和活動の場も豊富な首都圏と違い、常に顔の見える範囲の人々と

暮らしているなかで進められる山陰での活動の困難さをあらためて確認できた。地域社会のなかでまず信頼を構築せずには始まらないという制約があったことは、われわれ後継世代の活動にも重要な観点ではないだろうか。

難波さんは今の政治の「揺り戻し」に触れ、「自分たち中帰連がしてきたことは何だったのか」と無力感さえ感じると話された。どう「引き継ぐ」のかが強く問われているといえる。また、「中国での大気汚染」にも話が及んだ際、難波さんは「戦前に私が大阪のグリコで働いていたとき、大阪の空気はまさに今のテレビで報じられている北京のような状況でした」と苦笑していた。いったん相手側の立場になって捉えたうえで、自分たちの捉え方が適切なのかどうか問い直す――管理所で身に付けた観点が、今も活きていることが伝わってきた。

いま多くの人々が漠然と「戦争前夜」の雰囲気を感じている。中帰連や戦争体験者たちも同じことを感じている以上、今こそ「前事不忘後事之師」の実践が必要である。戦犯の手記に学ぶことは、私たちが、思いもしない「何か」に囚われていることに気付く機会となる。

例えば、「人間から鬼へ」という語り口があるが、中国への加害・虐殺は「鬼」がしたことだといっていいのだろうか。「出世のため」「命令に逆らえず」「自分を偉く見せよう」として何かをするというのは、「人間」の行為の範疇（カテゴリー）に入るのではないか。「鬼」というのは「人間」だったのではないか？

これを考える手がかりとして、第59師団にいた佐野勲さん（千葉出身、通信隊分隊長、1980年没）が管理所で書いた手記に学んでみたい。佐野さんは、過去を振り返りながら、親不孝を詫びる思いを『母』というエッセイにまとめている〔参加者で順に読み合った〕。

佐野さんは、当時勤めていた工場にも軍隊方式が入り、ビンタを受けるようになって、貧乏暮らしを脱出するため出世して偉くなり、金持ちになることしか考えていなかった。それには軍人になるのが早道だと考え、親に内緒で「予科練」に志願した。それを知った母親は「どうして、お前、親にも相談せず大それた事をやってくれたんだ」と泣き崩れ、「せっかくここまで育てたのに・・・」と悲しんだ。

それでも母は不動様のお守りを集め、夜なべをして「千人針」を縫っていた。しかし、佐野さんはそれにも気付かず反抗していた。出征の日、近所の人の「バンザイ」の声の中で、隠れるように母は「星は要らない、元気で帰っておいで」と涙で訴えた。

軍隊ではビンタや制裁で生き地獄の様であったが、一等兵になる頃には慣れきって、母親と同じような中国人の老婆を蹴飛ばし、撃ち殺すことさえできる人間になっていた。

敗戦から10年、戦犯になった佐野さんは「鬼」から「人間」に戻り、慚愧の念が込み上げてくるようになった。この戦争を「誰が始めたのか」と問い、過去を思うと胸がかきむしられ「もう二度と誰にもごまかされません」と書いている。

全員で最後まで読んだ後、感想や意見などを自由に述べ合った。

当時の兵隊たちは自分のことを「鬼」とは思っておらず、軍隊内の日常的な戦闘や行動に従事しているだけのことだった。しかし、管理所での教育を通じて、その何気ない日常的な行為（つまり「人間」としての行為）が、視点を変えてみれば「虐殺」「加害」といったまったく別の意味をもっていることに気付かされた。「人間」のしたことが「鬼の所業」だったのである。

「日本」「中国」「朝鮮」といったナショナルな枠組みが強調されるようになっているいま、その単純化や序列化が日常化し、侵略や加害を正当化した過去が再現されないとは限らない。予期しないこと、意図しないことが起きることは今後もあり得ると考えるのが中帰連の体験から指針とすべきことの一つではないだろうか。

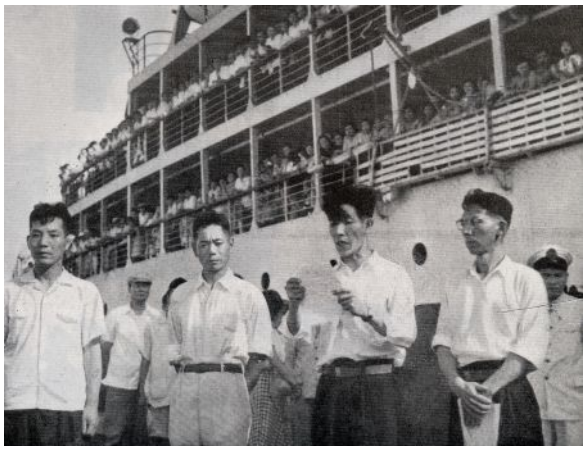
シリーズ　「図書資料」から（3）

『鬼から人間へ～
兵士の加害と反省の記録・戦争証言』
小山一郎・著A5　60頁）

記念館には市販されていない元中帰連の皆様の「自費出版」された貴重な記録などもあります。この『鬼から人間へ』もその1冊ですが、残念ながら東京北区に在住だった著者の小山一郎さんは2010年6月に亡くなられました。

小山さんも多くの仲間と共に56年に瀋陽特別軍事法廷で「起訴免除」となり、帰国の「興安丸」の前で仲間を代表して「声明文」を読んでいます。（写真）

本書には「2.26事件、入隊、三光作戦、ウサギ狩り（強制連行）、掠奪、敗戦、シベリア抑留、撫順戦犯管理所、認罪運動、寛大措置・・・」など広くご自分の体験を記していますが、小山さんがよく証言していたのは「ウサギ狩り」と言った強制連行の生々しい体験でした。



帰国船「興安丸」の前で代表挨拶をする
小山さん一郎さん（塘沽）1956.7.28

小山さんも所謂「三光作戦」にも参加し、多くの加害、略奪、虐殺も体験し、捕虜としてシベリア送りの5年後に中国に戦犯として引き渡され「撫順戦犯管理所」に収容されました。そこで十分に考える時間と寛大措置の中で過去を自己批判し懺悔に至った経過が記してあります。

本書には斬首や刺突訓練、強制連行の写真、所属していた59師団の組織図、また、小山さんたちが受けた『起訴免除決定書』の文面とその法廷写真も載せてあります。巻末には中国人犠牲者や強制連行犠牲者の数や、三光作戦の被害情況もあります。

アジア各地で「B、C級戦犯」の裁判結果なども載っています。中華民国（台湾政府）は149人を処刑し、米、仏、蘭など併せて971人が処刑されています。そして、中国が戦争賠償を放棄した事と、瀋陽と太原で開かれた「特別軍事法廷」では一人の死刑も無期もなかったことを多くの日本人は忘れています。あの戦争は日本人犠牲者310万人に対し、中国では1300万人、アジアでは2000万人もの犠牲を強いた侵略戦争だったのです。日本が戦争を始めなかったら原爆も東京大空襲もなかったのです。

記念館　「映像資料から」（3）

『ある戦犯の謝罪～土屋元憲兵少尉と中国』
（990年山形放送・30分）

チチハルで12年間の憲兵時代に自ら1917人もの中国人を検挙し拷問や投獄、虐殺した土屋良雄さんが戦後45年目に79歳で中国を訪ねたドキュメンタリーです。

日中国交回復後も訪中に二の足を踏んでいた土屋さんは「生きているうちに謝罪すべき」と元勤務したチチハル憲兵隊舎や、などを訪れずれています。いま市庁舎となっている元憲兵隊舎では拷問した部屋を訪ね、当時「警務統制委員会」の決定で取調

も裁判もせず数百名を「厳重処分」の名の下に殺害した川原も訪れています。当時はそれが憲兵隊長の手柄であり、その様な処分は中国各地で行われていたと証言しています。

土屋さんは 60 万人の元兵士と共にシベリアに抑留され、その 5 年後の 1950 年 7 月に中国に戦犯として引き渡され収容された「撫順戦犯管理所」も訪ねている。当時収容された部屋を訪ね職員（看守）のインタビューもあり、戦犯たちの人道的寛大措置の生活記録も写し出されている。そして、当時自身が書いた「手記」とも再会している。

土屋さんの心に残ることは、当時、八路軍がソ連と通信している無線室を発見し関係者を逮捕し、首謀者の張永興さんを含め 8 名を銃殺したことである。その張永興さんの墓地を訪ね、また革命烈士記念堂に祀られている張永興さんの遺影の前で謝罪している。土屋さんは張永興さんのご遺族への謝罪を希望したが、ご遺族は「いまさら」と面会を拒否したが、当時 8 歳だった四女の張秋月さんだけが家族と共に会ってくれた。土屋さんは秋月さんに土下座し「本当に悪いことしました」と心からお詫びをしている。秋月さんは今は瀋陽医科大学の教授だが、父を失い母親の実家に戻った秋月さんは、家族全員で働いても食べられず妹と祖母が栄養失調と結核で亡くなり、母も過労で亡くなり苦労の連続だったと訴えた。しかし、土屋さんが手を差し伸べると笑顔で「さよなら」と応え、バスの中からもうなずいてくれたのである。

憲兵時代の土屋さん＝花鳥賊さん提供

土屋さんは長い間、故郷・山形県上山市などで自身の加害・虐殺や戦争体験を証言して来たが 2001 年、享年 91 歳で「日中友好と平和」を願いながら亡くなった。

記 念 館 近 況

記念館には中帰連や多くの皆様から書籍や資料のご寄贈を戴きながら、人手が足りずダンボール箱に入ったままの資料もあります。4 月 27 日、松村理事長の呼びかけに応じて下さった石田隆至さん（亜細亜大）、児嶋俊郎さん（長岡大学）、遠藤美幸さん（神田外語大）、平山勉さん（慶応大）、松山英司さん（「受け継ぐ会」神奈川支部長）が来館下さり、寄贈された「軍事関連資料」約 100 箱の段ボール箱を開けて調査分類を始めて戴きました。

多くの書籍と共に貴重は資料なども含まれ、今後も調査整理を続けて戴き、次回は 6 月に作業下さる予定です。

今後も中帰連の元軍医の湯浅謙さんや、2000 年の「女性国際戦犯法廷」で加害証言しＮＨＫにその証言をカットされた金子安次さん、映画監督の高岩仁さんなどの寄贈資料も、順次、調査・分類を進めて行きます。

（整理中の貴著な「軍事資料」の一部）

お詫びとお願い

「会報」発行の遅れをお詫び致します。今回「会員」の皆様にはご参考に、過去 2 年間の「会費納入状況」を封筒のお名前の下に記入させて戴きました。会費、カンパなど宜しくお願い申し上げます。